

白鳥庫吉の歴史教育について

History education by Shiratori Kurakichi

内野 敦*
UCHINO Atsushi

はじめに

白鳥庫吉は近代日本における東洋史学の開拓者である。東京帝国大学教授として、その後の東洋史学のあり方に大きな影響を与えた。

白鳥庫吉は1865（慶応元）年、現在の千葉県にて、農業白鳥嘉一郎の子として生まれた。1883（明治15）年、千葉中学校を卒業。1890（明治23）年、帝国大学文科大学史学科を卒業し、学習院教授に就任した。このとき東洋史などの授業を担当したことが、東洋諸民族の歴史を研究するきっかけとなった。1904（明治37）年からは東京帝国大学文科大学史学科教授を兼任している。また1914（大正3）年に東宮御学問所が開かれると、7年にわたりその御用掛をつとめた。1921（大正10）年には学習院教授を免ぜられ、東京帝国大学の専任の教授となった。また1923（大正12）年には財団法人東洋文庫の理事兼研究部長にもなっている。1925（大正14）年、東京帝国大学教授を定年退官。1942（昭和17）年、77歳で逝去した。⁽¹⁾

その研究は龐大である。白鳥の研究の特色は、まずスケールの大きさにあるとされる。研究対象は朝鮮史をはじめ、東北アジア、北アジア、中央アジアの歴史におよび、また日本古代史、日本古伝説に関する問題も扱った。さらに広い地域に関する知識を駆使して、アジアの歴史を大局的に考察し、言語学をはじめ地理学、宗教学、民俗学、人類学、神話学など幅広い学問の成果を歴史研究に導入した。白鳥の歴史学のもう一つの特色は精緻な考察にある。白鳥は帝国大学で西洋近代の科学的歴史学研究方法を学んでいる。史料を網羅的に収集し、精密に比較検討するなど、史料批判も厳密であった。⁽²⁾

白鳥の主要な著書・論説は、『白鳥庫吉全集』（全10巻）に収められている。ただし、全集未収録のものも多い。⁽³⁾

白鳥庫吉は京都帝国大学教授の内藤湖南と並ぶ東洋史学の開拓者とされる。ところが内藤湖南と比べると、研究されることが少ない。代表的な白鳥庫吉論としては五井直弘『近代日本と東洋史学』の「第1章」「第2章」があるが、星の数ほどある内藤湖南論と比べると、寂しい限りである。⁽⁴⁾

本稿は、歴史研究者としてよりも、歴史教育者としての白鳥庫吉に焦点をあてたものである。実際、白鳥はすぐれた教育者であった。白鳥の歴史教育論、歴史教科書、歴史授業の特色を紹介しながら、白鳥が考える歴史教育のあるべき姿を明らかにしていく。今日の我々にも白鳥庫吉から学ぶことがあるのではないか。歴史教育のあり方を考えるうえで、何らかの参考になればと思っている。

* 学習院大学教職課程非常勤講師、開成中学・高等学校

1. 白鳥庫吉の歴史教育論

(1) 東洋史教育の重要性

白鳥庫吉は東洋史学の巨人である。しかし白鳥が東洋史の研究を始めたのは、偶然によるところが大きい。創設されたばかりの東京帝国大学史学科には、講師としてドイツの学士ルドヴィヒ・リース氏1人がいるだけで、白鳥は近代以前の西洋史を学んだだけだった。東洋史は大学では少しも学んでいない。ところが、1890（明治23）年、大学卒業後に学習院教授となり、同僚の市村瓚次郎の要請により、高等科での「東洋諸国の歴史」を担当することになったのである。当時「東洋諸国の歴史」を教えている学校はどこにもなく、学習院が時勢に先んじていた。しかし教授する側としては困惑した。そこで白鳥は知らないものを教えるために、大急ぎで日本に近い朝鮮の歴史から調べ始めた。これが東洋史学者、白鳥庫吉を生むきっかけとなった。⁽⁵⁾

なお、日本全国の中等教育で「東洋史」が誕生するきっかけは、1894（明治27）年、高等師範学校長の嘉納治五郎が中心となり、中等学校における各学科の教授に関して、研究・調査を開始したことにある。この時、歴史科の会合において、那珂通世が外国歴史を西洋歴史と東洋歴史に二分すべきことを提議したところ、列席者が賛同したことが、「東洋史」誕生の発端となった。これにより文部省も諸学校に「東洋史」の科目を置くことにした。⁽⁶⁾

したがって白鳥が学習院で「東洋諸国の歴史」を教え始めたのは、日本全国の学校に「東洋史」が置かれる数年前のことである。

白鳥は1904（明治37）年より東京帝国大学の史学科の教授を兼任するようになり、東洋史学者としての地位を確立した。研究対象も、朝鮮から満州、蒙古、中央アジアなど東洋諸民族の歴史に拡大していった。日露戦争後の1905（明治38）年、白鳥は「戦後における歴史教育者の任務」という論説を発表している。⁽⁷⁾

この論説で白鳥は、歴史教育における東洋史の重要性を訴えている。日本開国後、日本人は「我を忘れたかの如くに、一にも西洋、二にも西洋と、主として西洋の事物を学」んだ、という。そして世界史もヨーロッパ史を中心に学んだため、「西洋歴史の智識には富んで居る」が、朝鮮、東南アジア、インドの歴史は「まるで真暗」であり、中国史も元明以後については多くの人にはよく知らない、という。「他国の優れたる事物を汲々として採用する」のは日本の長所であり、憂うべきことではない、と白鳥は考える。しかし「我が日本は、今や西洋文明の大綱を取り尽して、思想界にも実際界にも独立すべき自覚の時期に入った」のだという。そこでこれからは、「日本人が、世界に向って勢力を発展すべき時代」に入ったとする。

我が日本人の勢力を発展すべき方面は、亜細亜である。我が日本人と利害関係の最も深くなりゆくべき土地は、亜細亜である。学者も、教育家も、政治家も、宗教家も、商工業家も、速かに亜細亜の研究をして、これを我が日本人の勢力範囲とせねばなりません。

というのである。そこで日露戦争後における歴史教育者の任務としては「我が国民の東洋研究に対する興味を振起するのを以って、第一の急務である」と結論付けている。

同様の論説に、同じく1905（明治38）年に発表された「普通教育に於ける東洋史に就て」がある。⁽⁸⁾

この論説でも白鳥は普通教育における東洋史の重要性を訴えるが、とくに西洋人による

東洋研究に比べると、日本人の東洋研究が遅れていることを嘆いている。東洋研究を目的とする学会も必要だし、図書館も必要だが、何よりも「普通教育に於ける東洋史の教授を改良拡張して其知識の普及を謀ること」が急務であるとする。世の中には衰えた東洋諸国の歴史など考究する必要がないと説く人もいる。しかし東洋諸国は過去に「花々しい事業を成し遂げた」のであり、軽視すべきではない。また「国家の衰へて行く次第を考へるのも盛に成り行く次第を尋ぬるのも同様の価値」があるのだ、という。「世界の歴史は円満なる一体のもの」であり、国史と西洋史は東洋史によって始めて首尾貫通の世界史となるのだとして、東洋史の重要性を訴えている。

以上のように、白鳥は当時の西洋史偏重の風潮に対して、東洋史の重要性を訴えた。それは日露戦争後、日本のアジア進出のためにも東洋諸国の理解が必要だからである。もちろん、今日的な観点からすれば、白鳥の主張は帝国主義を肯定するものとして、受け入れられない部分もあるだろう。しかし今日の世界史教育でも、とくに近代史において東洋史の比重が西洋史に比して小さい。現在、アジア諸国との交流が増えていることを考えればアジア諸国についての理解は不可欠である。とくにアジア諸国の近代史について、もっと力を入れたいものである。

(2) 日本史教育の重要性

白鳥は東洋史の重要性とともに、日本史の重要性も主張した。白鳥自身、学習院中等科や東宮御学問所で国史の授業を担当し、また研究においても邪馬台国をはじめ、日本上代史について、多くの論説を残している。⁽⁹⁾

白鳥の1937（昭和12）年の論説に「外国文化の摂取と歴史教育」があり、日本の外国文化摂取の特徴とともに、日本史教育の重要性について主張している。この論説で白鳥は、まず学習院の学制を高く評価している。白鳥赴任当時、学習院の学制では、「歴史を最も重要なものとし、そのうち特に国史を重んじ、その次が東洋諸国史、その次に西洋史といふ順であつた」という。⁽¹⁰⁾

実際、『学習院百年史』掲載の教科課程表で確認すると、三浦梧楼院長時代、中等学科1年級から5年級までの歴史授業単位数は計16単位で、これは文部省規定の7単位を大幅に上回っていることが分かる。そのうち日本歴史は計11単位、支那歴史は5単位である。西洋歴史は6年級および高等学科で学ぶことになっている。これは三浦院長が歴史の授業を改革したことによる。⁽¹¹⁾

このように東京帝国大学の史学科では西洋史しか教えないのに、学習院では国史を重んじていた。白鳥は論説「外国文化の摂取と歴史教育」において

日本国家はどこまでも立派な国である、儼然たる自主・独立の国であるといふ考は、国民の腹の中にあつたのである。しかし西洋文化に心酔のあまり、極端な欧米崇拜に陥つた一派もあつたことは争はれぬ事実である。三浦梧楼子爵が学習院の学制を改め、西洋史のみでは西洋人になつてしまふ、日本人を作るには日本史を教へねばならないとし、日本史を主位に置いたのは恰度かゝる時勢であつたのである。これ実に日本の歴史教育上の一見識として心服に堪へない次第である。

と述べている。「文部省の態度は西洋文化を摂り入れる精神であり、学習院の学制は国家を重んずる精神」だったとする。

また白鳥によれば、「昭和になつて始めて日本の文化は、西洋文化に遜色のないものと

なつた」し、「日本は今や世界文化学校を卒業してしまつた」、そればかりか「外国文化を採用してこれに日本人の考へを加へ、茲に眞の日本文化が生れ、生長しつゝある」という。日本の外国文化摂取は、「単なる模倣ではない」こと、日本独自の修正を加えて創造していくことに特徴があるとする。仏教の輸入はその一例である。「仏教を敬したのは、その文化に、日本人が頭を下げたのであつて、国家として頭を下げたのではない」という。「日本天皇は絶対的な存在」であり、外国文化のよいところは採って「御自らの徳」とされる、これが「皇道」であるとする。国史を教える場合、「この御精神を徹底さすべく教育することが必要」だと結論付けている。

ここで「皇道」について補足すると、敗戦以前の多くの日本人がそうであつたように、白鳥は天皇を現人神と考え、信仰に近いものをもっていた。「皇道」はいわば天皇教である。白鳥によれば、「日本の皇道は人民の幸福と国家の隆昌とを目的」としており、キリスト教、仏教、儒教など諸宗教の長所を採って、ますます自教の大をなすものだという。⁽¹²⁾

このような「皇道」思想は、今日ではもちろん受け入れられない。しかし日本が外国の文化や宗教に対して寛大であり、それを摂取するときには、日本独自の修正を加えて創造していくという、白鳥の論には妥当性があるだろう。東洋史学者の白鳥庫吉が日本史教育の重要性を訴えたのは意外な印象を受けるが、そこには欧米崇拜に陥った近代日本への反発があつたと考えられる。

(3) 人間中心の歴史

白鳥庫吉の歴史教育論として注目すべきは、中等学校地理歴史教員協議会における講演「中等教育に於ける歴史教授と教科書とに就きて」であろう。これは1914（大正3）年、講演速記録として残されたものである。⁽¹³⁾

精密な実証主義のイメージが強い白鳥だが、けっして無味乾燥の歴史教育を志したわけではない。むしろ血の通う、人間中心の歴史教育を志向していたことが、この講演から分かる。

この講演でまず白鳥は中等学校における歴史教育における大きな欠陥を指摘している。それは、生徒が歴史の知識をすぐに忘却する、ということである。例えば、学習院を例にとると、中等学科第1年で学んだはずの歴史上の事実を、第6年のときに聞いてみると、多くは忘却している。また、東京帝国大学での卒業時の口述試験でも、中学校・高等学校で学んだはずの平易な問題も、「十分に返答の出来る学生は極めて少数」なのだという。

それは学生たちが外国語や数学に比べて歴史を軽視しており、「歴史などは暗記物」として試験前に棒暗記するだけで、試験後はもう用がない、といった風潮があるからだという。何よりも歴史は「面倒なものとして嫌はれてゐる」し、学生は一向に興味をもたない。ところが、同じ学生が、新聞雑誌にのっている英雄豪傑の話は面白いし、戦争の話はよるこんで聞く。どうしてなのだろうか。

白鳥によれば、徳川時代の儒教の教育では、歴史は尊ばれた、という。歴史は「人格修養の方便」であり、「為政者に教訓を与へる」ものであつた。「歴史には必ず道徳的批判」が伴っていた。歴史は「人間本位」のものであり、正しい道はどこにあるのか、自分だったらその時どうするか、を考えるものであつた。

歴史上の事実は自分とは幾百年も幾千年も隔たつた遠い昔のことではなく、すぐ自分の周囲にあり自分の一挙一動がそれに反映する。古人も書物の上に名ばかり残してゐる枯骨では無くして文字の間から踊り出して自分の面前に動いてゐる生きた人間であ

る。斬れば血の出る人間である。まづかういつたやうな効果を生ずるのであります。

として、江戸時代の歴史教育を評価している。ただし、そのような歴史教育では、事実そのものの真偽は大した問題にならない。人間を「正邪忠奸」にあてはめて単純に判断したり、固定観念から「軽率な批判」を加える、という欠点もある。とはいえ、「生きた人間の記録である歴史」を、自分全体の心生活と切り離さないものとして見るのは、長所であると白鳥は指摘する。

ところが西洋の学問が入ってきてからは、歴史は「独立した一種の科学」になった。「歴史はもはや人間本位で無くなつた」という。中学校の歴史教育も、同じ方向をとるようになり、「教科書も極めて冷静に書かれ」、「全く客観的」に扱われるようになった、という。

その結果、学生は歴史の知識をほとんど忘れるようになった。学生は歴史上の人物でも事件でも、「自分とは縁もゆかりも無い遠い昔のもの」と考えるようになった。「学生が歴史に興味を有たないのも無理では無からう」と指摘する。また歴史の授業時間が少ないため、「勢ひほんの骨組みばかりになつて血も肉も無いものとなつてしまふ」という。

では、どうしたらよいのだろうか。まず白鳥は、歴史上の事実を知識として授けることはもちろん必要だが、「別に道徳的の見方も、美的の見方も無くてはならない」と論じている。「人間を中心として歴史を見る、偉大なる個人が強烈な感情、鞏固な意志を以て世を動かし国家社会を動かしたことの記録として歴史を見る」ことが重要だという。それは「今日の科学的歴史と昔風の考とを折衷し融合したもの」である。

また教科書についても、教える項目をずっと減らすべきだと白鳥は訴えている。教授すべき事項を少なくし、それを出来るだけ具体的に力をこめて説く必要がある、とする。教科書も今のような無味乾燥なものではなく、少し潤いのあるものにし、「骨ばかりでなく、肉のある記述」が必要だと論じている。

以上の白鳥の論は、今日の中学校・高等学校における歴史教育の問題にそっくり当てはめることができるのではないだろうか。今日でも歴史は無味乾燥な、ただの暗記物になりがちだ。白鳥のいうように人間中心の歴史、血や肉のある歴史を教えたいためである。もちろん教える量に対し、歴史の授業時間が少なすぎるという問題もあるが、そこは教師の工夫次第だろう。歴史上の人物について思いをはせ、自分だったらその時どうするか、ということを生徒に考えさせたいものである。

2. 白鳥庫吉の歴史教科書

(1) 西洋史教科書

白鳥庫吉著の歴史教科書には、どのような特徴があるのだろうか。白鳥の西洋史教科書としては、1897（明治30）年に富山房より出版された『西洋歴史』をはじめ、それをもとにした『新撰西洋史』などがある。柳川平太郎の研究によれば、『西洋歴史』と『新撰西洋史』の難易度に大きな違いはなく、古代史の扱いに若干の相違があるのみで、中世以降はほとんど大同小異であるという。⁽¹⁴⁾

ところが周知のように、これらの教科書の事実上の執筆者は津田左右吉である。白鳥は出版社からの要請で西洋史教科書を執筆することになったが、多忙のため、津田左右吉に下請けを依頼したのである。ただし、白鳥が編述の方針を示している。津田の自叙伝によれば、

これまでの西洋史の教科書は、記載せられた一々の歴史的事実の間に脈絡がよくとれてゐない嫌ひがあるから、大勢の動いてゆく道すぢがそれによつて説明のできるやうな組み立てにすること、文芸・学術などの文化史上の事実が軽くまた歴史の大勢と離して取り扱つてあるから、それを歴史の動きの一つとして叙述すること、東洋また日本との関係が殆ど記してないから、それに力を入れて書くこと、

などの指示があったようだ。津田は月に二、三回くらい白鳥家に伺い、草稿の手直しをしたのだという。⁽¹⁵⁾

『西洋歴史』を読むと、史実を客観的に叙述しており、悪く言えば、無味乾燥な印象である。先ほどの論にあったような、人間中心の歴史とは言い難いのではないか。この点については『西洋歴史』冒頭の「例言」に次のように述べている。

史論は史実に基きて生ずること固よりなりと雖初めて史を学ぶものは先づ先哲の史論によらば史実を解し難し。されど学校の教授にてかゝる示導をなすは教師の任務なれば此書は専ら事実を略叙するに留めたゞ其組織に意を致して因果の関係を会得し易からしめむとしたり。教師は之によりて偉人の行為時運の大勢を解説し又学生をして之を考察批判せしむるを要す。⁽¹⁶⁾

このように、教科書としては歴史的事実を客観的に叙述するが、授業においてはこれだけではだめだということである。教師の役割は、人間中心の歴史を解説し、学生に考察や批判させることだという。一般的な教科書では様々な制約があるのだろう。人間中心の歴史授業は教師に役割を委ねている。

(2) 日本史教科書

今日、白鳥の著書として書店で売られているものに『昭和天皇の教科書 国史』（原題『国史』）がある。1914（大正3）年から7年間、東京高輪に東宮御学問所が設けられ、皇太子の裕仁親王が5人の学友とともに特別な教育を受けた。白鳥は東宮御学問所の御用掛として歴史（国史・東洋史・西洋史）を担当した。この書は東宮御学問所での国史の教科書であり、原本5巻を縮写合冊したものである。⁽¹⁷⁾

巻末の所功の解説によれば、『国史』の著しい特色は、ほとんどの章名自体に天皇の称号を掲げて、神武天皇から明治天皇に至る歴代の天皇について記述しており、しかも主要な天皇の聖徳を具体的に説明していることにある。歴史の教科書であるとともに、帝王学の教科書でもあった。ただし皇室関係だけでなく、政治史と文化史を中心にバランスよく概説してある。その歴史認識は、「的確公正」であるという。⁽¹⁸⁾

白鳥の『国史』の始まりは「神代」にある。「我が国には上代よりいひ伝へ来りし神代の物語あり、建国の由来、皇室の本源、及び国民精神の真髓みな之に具はれり」として、イザナギ、イザナミから叙述を始めている。

ただし、東宮御学問所での学友である永積寅彦によれば、神話はそれほど詳しくはやらなかったらしい。学習院では白鳥は乃木希典院長に「神話と歴史事実は別なものであることを、とくと生徒に話したい」と了解を求めており、それを前提に授業をしていたようである。⁽¹⁹⁾

『国史』の終わりは明治天皇である。明治天皇については、

天皇は幼き御時より活潑剛毅に渡らせ給ひしが、また温情を以て侍臣を遇し、よく傳者の言を聴き給へり。即位の後も忌諱を憚らず正義直諫すべきことを百官に詔し給ひ、また常に侍臣をして書を講じ道を説かしめ、其の忠言を求めて啓沃を期し給ひき。⁽²⁰⁾

このような調子で、その聖徳を語っている。全国の学校で使用される一般的な教科書ではないがために、独自色を出しやすかったのだろう。天皇中心の歴史とはいえ、白鳥の主張する人間中心の歴史がこの教科書では実現されているといえるのではないか。

(3) 東洋史教科書

東宮御学問所で白鳥は国史・東洋史・西洋史を担当したが、このうち国史・東洋史はみずから教科書を執筆し、西洋史のみ箕作元八博士の著作を使用した。⁽²¹⁾

その東洋史の教科書は、『白鳥庫吉全集』第8巻に『東洋史』として収録されている。全集の「編集後記」によれば、出版が予定されていたが、何らかの理由により出版されなかったものらしい。東京築地活版製造所の印があり、「要三校」「要四校」等の文字が入っているという。⁽²²⁾

白鳥の『東洋史』は中国史については、堯舜禹から始まる。とくに堯舜禹についての扱いは注目に値する。白鳥といえば、いわゆる「堯舜禹抹殺論」で知られるからである。白鳥は1909（明治42）年に「支那古伝説の研究」を発表し、漢学者に大きな衝撃を与えている。この論文で白鳥は「余輩は堯舜禹三王の史実を疑はざるを得ず」と主張した。堯は天、舜は人、禹は地を司るものであり、伝説作者が天地人三才説の思想を眼中において構成したものであるという。⁽²³⁾

この論考は漢学者から激しい非難を受けた。とくに東京高等師範学校林泰輔との間で「堯舜禹抹殺論争」が展開されたことは有名である。「支那古伝説の研究」は漢学者流の尚古主義に対して叩きつけた東洋史学の独立宣言書であると評価されるとともに、アジア諸民族の現状を無視・蔑視する方向に研究者をひきずりこむ重石と化したとの見方もある。⁽²⁴⁾

さて、白鳥の『東洋史』ではどうだろうか。東宮御学問所の開設は1914（大正3）年であるから、教科書執筆時にはすでに堯舜禹の史実を疑っているはずだ。『東洋史』第二章・第二節「上代の伝説」において、中国史は次のように始まる。

伝説は古の天子と其の事蹟とを語ること多きも、其の詳なるは堯舜にはじまる。堯は其の仁天の如く其の智神の如かりしかば、諸侯みな悦服して天下太平なりきといふ。暦法の定められしは帝の時なりとぞ。子ありしも不肖にして諸侯之に帰せざりしかば、至孝の聞え高き舜を畎畝の間より挙げて之に位を禪りぬ。⁽²⁵⁾

このように、「上代の伝説」として、堯舜禹から夏殷周の時代を扱っている。「上代の伝説は必しも正確なる歴史にあらずと雖も、其の裏に潜める思想は之によりておのづから推知せらる」として、正確な歴史ではないことを断っている。ただし、堯舜禹の史実を否定するようなことまでは記していない。教科書としての公正さを重視したのだろう。

ちなみに、1898（明治31）年に出版された桑原隲蔵『中等東洋史』では、中国史は三皇五帝から始まる。三皇五帝については「伝説に拠るに」と断っているが、堯舜禹については歴史的事実であるかのように記述している。⁽²⁶⁾

さて、白鳥『東洋史』は中国・インド・北方諸民族等の歴史について扱い、第一次世界大戦まで概説している。全般的には『国史』と同様、「的確公正」という印象である。大

きな特徴は、最後に「回顧および終結」という節があり、持論を述べていることだろう。それは東洋の文化、とくにインドと中国の文化が、世界の人文に大きく貢献したが、それらを融合し、特殊の国民文化を展開したのが日本である、ということである。日本があらゆる世界の文化を取り入れて、これに新形態を与え、世界における新しい文化の開発に寄与すべきことを訴えている。白鳥『東洋史』は東宮御学問所での教科書であり、このような独自色を出しやすかった。しかし、この書は前述のように出版されず、『白鳥庫吉全集』に収録されるまで、世に出ることはなかった。

文部省管轄下の全国の学校で使用されるような東洋史教科書としては、白鳥著のものはない。『西洋歴史』はあるのに、東洋史教科書を執筆していないのは、不思議である。白鳥の娘、君子によれば、「父は名誉になることやお金の儲かることなど、たいてい辞退して他の方に譲ろうとするのが常であった。教科書の出版などずいぶん勧められたがお断りしていた」というから、あえて執筆しなかったのだろう。⁽²⁷⁾

津田左右吉「白鳥博士小伝」によれば、教科書の編纂は収入を得る道であるが、「それに心がひかされると学問の研究のおろそかになつてゆく虞れがあるから、自分はそれに近づかないやうにする」と白鳥は語っている。⁽²⁸⁾

3. 白鳥庫吉の歴史授業

(1) 学習院での授業

では、白鳥の実際の授業はどのようなものだったのだろうか。白鳥の学習院における授業については、日高第四郎の回想がある。日高第四郎は、第一高等学校教授、文部省学校教育局長、国立教育研究所長、文部事務次官などを歴任し、『教育改革への道』などの著書がある。日高第四郎は、学習院中等科上級生の頃、白鳥に東洋史を学んだ。中等科4年のとき、明治天皇が亡くなり、乃木希典院長が殉死しているので、明治末大正初めの時期である。⁽²⁹⁾

日高によれば、白鳥の授業はまず地図（マップ）を重視した。「歴史を学ぶ時には必ず地図を見なければいけない」というのが口癖だったので、白鳥の代名詞は「マップ」だったという。教科書は桑原隲蔵のものを使用していたが、「ここはこう直した方がよい」などと理由を明かにして批評していた。

まず授業時間のはじめには、前回の講義の大切な要点を短く質問した。

先生の質問のなさり方は、例えば教壇に立たれるとすぐ成吉思汗の四人の息子の名は？ときかれます。「ジュチ、チャガタイ、オゴタイ、ツルイ」と答えると、そうですそれでよろしい。次の時間のはじめにもまた同じことを問われます。又同じように答えるとそれでよろしい。ある時三度目にも同じ質問が出ました。先生がおいそがしくて前のことを忘れられたのかと皆がワアッと笑いました。すると答をきいたあと先生もにこにこなさって、これで「もはや一生忘れない」そう言われました。

このように、授業のはじめ3分か5分で生徒を笑わせながら復習をしていた。

白鳥は教科書を使用しながらも、教科書を越えて面白く講義した。例えば、383年の淝水の戦いで、東晋の謝安（下の引用文では謝石）のもとに前秦軍大敗の報が入ったとき、

謝石は庭石の上で踊り上って喜んだら、くつが割れた！すると皆がどっと笑うと、く

つと言ってもそれは皮靴ではなく木履（ポックリ）様のものだったから割れたのだ、嘘ではない！何々史のどこにちゃんと書いてあると、そうして若者どもの興味をそそり乍ら大切なことははっきり憶えておかなければいけない。細かいことは、Encyclopaedia Britannicaを見ればすぐ分かると言われました。

このように、劇のような面白い話をしていたという。

また、白鳥の授業では、日本史を東洋史の一部として見たり、西洋史の事件と中国の事件とを比較して、問題の提起をするのが常だった。

そして白鳥は授業の合間に歴史学の研究について語った。「歴史学の研究には、史料の比較が甚だ必要である」として、日本民族の起源についても比較言語学の立場から語ったりした。また「金」の遺跡から掘り出された石摺りを見せて、黑板にかかげ、漢字を読みつつ「ここが未だ分らぬ、どうだ誰か読める人はないか」と生徒に問いかけたりした。「学問ほど面白いものはない。こんな面白いものを世の人が棄てて顧みないのは合点が行かない」と、嬉しそうに話をしていたという。⁽³⁰⁾

このように、白鳥の授業は教科書を越えて、より具体的に、エピソードを交えた授業を行った。しかもそれは、いい加減なものではなく、史料に基づいた正確なものだった。科学的ではあるが、人間中心の歴史、血や肉のある歴史を実践していたといえよう。地図を重視し、生徒の記憶を定着させるための復習も怠らなかった。何よりも、学問の面白さを伝え、生徒の知的好奇心をかきたてる授業は、白鳥ならではの魅力だろう。

(2) 東京帝国大学での授業

東京帝国大学では、どのような授業だったのだろうか。大学では、少々難解だったようだ。例えば末松保和は白鳥の講義「漢魏時代の西域史」を受講したが、「先生の講義から受けた感銘というようなものもなかった。それはいうまでもなく先生の講義を内容的に受けとめる力が私になかったからである」と回想している。それでも「一代の碩学に接する機会を得たことを無上の仕合せ」と感じた。⁽³¹⁾

また前嶋信次も、白鳥に憧れて東京大学の門をくぐったものの、「一心に耳を傾けたのであるが、あの格調高い名講義が、当時の私のような青二才によく理解出来るはずはない」として、「ただ無我夢中で坐っている時が多かった」という。⁽³²⁾

一方で、杉勇は「毎時間われわれに言語文化史的・歴史地理的・民俗社会学的諸方法を縦横に用いて西域史上の難問を、もつれた糸をほごすように解釈されたのには、無学な私には大きな灯となって心に銘ぜられた」という。また白鳥は講義の冒頭では折々の感想を述べたが、諄々として学問の道を説くのが常であった。それも単なる抽象論ではなく、具体的な自身の体験話だったので、実に印象が深かったと回想している。⁽³³⁾

石田幹之助は大学1年のとき「魏志」東夷伝についての演習に参加したが、序言の「東は海に漸り西は流砂に被ぶ・・・」から数行だけで1学期が終わり、2学期は休講になってしまったという。それでも「私たちが大学へ入っての喜びの最大なるものは、この演習でした」と語っている。白鳥は『書に曰く』の「書」とは何のことですか』『西、流砂に被ぶ』とは何のことですか』と一々学生に質問し、堯典舜典の本文批判を試みていたという。⁽³⁴⁾

三島一も白鳥の授業を絶賛している。白鳥の「東洋史概説」の講義は、「出席学生が、室にあふれ、廊下にまで雲集する有様」で、なかには文学部の他学科、他学部の人さえ少なくなかったという。「白鳥先生の、壮大なスケールの講義に魅せられた学生たちは、そ

の終了後、本郷通りに出て、食事をとったり、茶を喫したりしながら、先生の講義からうけた感激を、楽しく語りあった」と回想している。また白鳥は、東洋史学について「これほど面白い学問はない」とたえず語った。

この学問の分野は未開拓であり、ちょうど荒野に宝石を探すようなもので、一生かかっても大した成果が得られないかも知れないが、やりがいのある仕事である。だからこの学問をやって出世をしようと思っただけではないが、一生懸命にやっていたら必ず認められるとよく話された。

というように、学生を鼓舞激励することも忘れなかった。⁽³⁵⁾

以上のように、大学での講義は少々難解だったようだが、言語文化的・歴史地理的・民俗社会学的諸方法を用いた、壮大なスケールの講義に、多くの学生が魅了された。また講義の合間に学問の道、学問の面白さを説き、学生に大きな刺激を与えていたことが分かる。学生の知的好奇心をかきたてる、これこそ白鳥ならではの授業だった。

おわりに

以上、白鳥の歴史教育について、歴史教育論、歴史教科書、歴史授業の観点から探ってみた。全体的に言えることは、精密で実証的な研究者としてのイメージとは逆に、無味乾燥ではない、人間中心の歴史、血の通う歴史を学生に伝えようとしていた、ということである。近代の科学的な歴史と江戸時代の道徳的な歴史を折衷し、融合しようとしていたのである。

多くの証言から、魅力的な授業を展開していたことが分かる。このような魅力的な授業を支えたのは、白鳥の不断の努力によるといえよう。孫の白鳥芳郎によれば、学習院時代、学習院から受け取る五十円位の月給をなげうって、洋書を五十五円で購入したこともあるという。また授業の休憩時間のわずか十分、十五分の間でも語学の習得に励み、辞書を開いては片端から単語の暗記に努めていたらしい。⁽³⁶⁾

語学の習得は研究のためであって、歴史の授業には直接関係がないかも知れない。しかしこのような教師の研究熱心な姿勢は、何らかの形で生徒に伝わり、生徒に刺激を与えるのではないだろうか。熱心に研究し、学問の面白さを伝える。これが生徒の知的好奇心をかきたてるのではないか。このような態度こそ、白鳥から学びたい点である。

【註】

- (1) 白鳥芳郎「白鳥庫吉博士略年譜」『東方学』、第44号、1972年7月、p.28-31
- (2) 窪添慶文「白鳥庫吉」『20世紀の歴史家たち(1)・日本編上』、刀水書房、1997年、p.17-29
- (3) 『白鳥庫吉全集』(全10巻)、岩波書店、1969-71年(以下、『白鳥全集』と略す)
- (4) 五井直弘『近代日本と東洋史学』、青木書店、1976年
(第1章「白鳥庫吉における日本と中国」、第2章「日本ならびに中国文化論——白鳥庫吉・津田左右吉・内藤湖南——」)
- (5) 白鳥庫吉「学習院に於ける史学科の沿革」『白鳥全集』、第10巻、1971年、p.378-383
(『学習院輔仁会雑誌』、134号、1928年10月掲載)
- (6) 窪寺紘一『東洋学事始——那珂通世とその時代』、平凡社、2009年
- (7) 白鳥庫吉「戦後における歴史教育者の任務」『國學院雑誌』、第11巻、1905年11月、

- p. 1 - 6 (『白鳥全集』未収録)
- (8) 白鳥庫吉 (講演) 「普通教育に於ける東洋史に就て」『教育公報』、第300号、1905年10月、p.25-29 (『白鳥全集』未収録)
- (9) 日本上代史関係の論説は『白鳥全集』第1巻、第2巻に収録されている。
- (10) 白鳥庫吉「外国文化の摂取と歴史教育」歴史教育研究会『歴史教育』、第11巻第10号、1937年1月、p.1655-1664 (『白鳥全集』未収録)
- (11) 学習院百年史編纂委員会編『学習院百年史』、第1編、学習院、1981年、p.237-245
- (12) 白鳥庫吉「皇道に就て」『有終』、第190号、1929年9月 (『白鳥全集』未収録)
- (13) 白鳥庫吉 (講演) 「中等教育に於ける歴史教授と教科書とに就きて」『中等学校地理歴史教員協議会 議事及講演速記録』、第1回、1914年12月、p.89-105 (『白鳥全集』未収録)
- (14) 柳川平太郎「白鳥庫吉と旧制中学西洋史教科書」『高知大学教育実践研究』、第24巻、2010年3月、p.73-80
- (15) 津田左右吉「学究生活五十年」『津田左右吉全集』、第24巻、岩波書店、1965年、p.93 (『思想』、1951年1月掲載)
- (16) 白鳥庫吉「西洋歴史」『白鳥全集』、第9巻、1971年、p.425 (富山房、1897年出版)
- (17) 白鳥庫吉『昭和天皇の教科書 国史』、勉誠出版、2015年
- (18) 所功「白鳥庫吉博士と『国史』の教科書」、註(17)『国史』p.730-750
- (19) 永積寅彦『昭和天皇と私』、神道文化会、1992年、p.77-78
- (20) 註(17)『国史』、p.714
- (21) 註(18)と同じ
- (22) 栗原益男「編集後記」『白鳥全集』、第8巻、1970年、p.594
- (23) 白鳥庫吉「支那古伝説の研究」『白鳥全集』、第8巻、p.381-391 (『東洋時報』第131号、1909年掲載)
- (24) 小倉芳彦「日本における東洋史学の発達」『岩波講座世界歴史 第30巻——現代歴史学の課題』、岩波書店、1971年、p.480-482
- (25) 白鳥庫吉「東洋史」『白鳥全集』、第8巻、1970年、p.239
- (26) 桑原隲蔵「中等東洋史」『桑原隲蔵全集』、第4巻、岩波書店、1968年
- (27) 白鳥君子「父のおもいで(一)」『白鳥全集』、第5巻、1970年、月報
- (28) 津田左右吉「白鳥博士小伝」『津田左右吉全集』、第24巻、岩波書店、1965年、p.147 (『東洋学報』第29巻第3・4号、1944年1月掲載)
- (29) 日高第四郎『教育改革への道』、洋々社、1954年
- (30) 日高第四郎「白鳥庫吉先生の想出」『白鳥全集』、第1巻、1969年、月報
- (31) 末松保和「白鳥先生の最終講義のことなど」『白鳥全集』、第3巻、1970年、月報
- (32) 前嶋信次「西域史の御講義」『白鳥全集』、第7巻、1971年、月報
- (33) 杉勇「白鳥先生を追慕して」『白鳥全集』、第6巻、1970年、月報
- (34) 石田幹之助・他「先学を語る——白鳥庫吉博士——」『東方学』、第44号、1972年7月、p.152-178
- (35) 三島一「白鳥博士の学風」『白鳥全集』、第8巻、1970年、月報
- (36) 白鳥芳郎「祖父白鳥庫吉との対話」『白鳥全集』、第10巻、1971年、月報